

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-141	12-033	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
<b>題名 (原題/訳)</b>		
Factors predicting change in frequency of heavy drinking days among alcohol-dependent participants in the National Epidemiologic Survey on alcohol and Related Conditions (NESARC). アルコール依存症の対象者における多量飲酒日の頻度を変える予測因子 (the National Epidemiologic Survey on alcohol and Related Conditions)		
<b>執筆者</b>		
Sarsour K, Johnston JA, Milton DR, Duhig A, Melfi C, Moss HB.		
<b>掲載誌</b>		
Alcohol Alcohol. 2012 Jul-Aug;47(4):443-50		
<b>キーワード</b>		
アルコール依存症、行動変容、うつ		
<b>要 旨</b>		
<b>目的：</b> アルコール依存症の者における 4 年後の多量飲酒の頻度を変える予測因子を Wave1 (2001-2002 年) および Wave2 (2004-2005 年) に調査した一般集団 (the US National Epidemiologic Survey on Alcohol and Related Conditions) で同定する事。		
<b>方法：</b> 研究コホートは過去 1 年間に DSM-IV の診断を受けたアルコール依存症の対象者を含んでいる。Wave1 は 1484 名で、このうち Wave2 で 1172 名が存在し、対象とする要因のデータを集められたのが 1123 名であった。多量飲酒 (アルコール量/日 ; 男性 $\geq 70\text{g}$ 、女性 $\geq 56\text{g}$ ) の頻度は多量飲酒日の日数で定義した。ベースライン (Wave1) から Wave2 の間の多量飲酒の頻度の変化が測定された。ベースラインの多量飲酒日の日数を調整した共分散分析が多量飲酒日の日数の変化と関連した個々の要因を調査するために使われた一方、多変量回帰モデルが多量飲酒日の日数の変化と関連する要因を評価するために採用された。		
<b>結果：</b> 全体的に平均多量飲酒日は Wave1 で 119.4 日 (標準誤差 ; 1.8)、Wave2 で 82.5 日 (2.1) と減少した ( $P < 0.0001$ )。喫煙者に比し、非喫煙者は多量飲酒日が平均で 13.4 日 (6.7) 減少した ( $P < 0.05$ )。アルコール依存の基準となる許容量は有意に多量飲酒日の減少と関連した ( $P < 0.05$ )。うつ/気分変調の状態の変化は共分散分析において多量飲酒日の大きな減少と関連したが、調整した多変量モデルでは関連しなかった。		
<b>結論：</b> 本研究結果は喫煙とアルコール依存の基準となる許容量がアルコール依存症の者の長期追跡において重要な要因であり、アルコール依存症の患者が最大限の治療的利益を達成できる介入方法の選択にも影響を与えることを示した。		